

方言変容に関する社会言語学的研究の試み

—京都府綾部市上林におけるナルからテヤへの変容を対象として—

酒 井 充

1. はじめに

2. 上林の社会的特色

1. 地理と歴史の概要
2. 近年の地域変動

3. ナルとテヤ

1. 地理的分布
2. 言語的特徴

4. 方言の使用状況と方言体験

1. 調査対象者の全体的特色
2. ナルとテヤの使用状況
3. 子供の時の使用方言
4. ナルとテヤの場面による使い分け
5. 方言体験

5. 方言変容の条件

1. ナル・テヤの使用に関係のある条件
2. 子供の時の使用方言と関係のある条件
3. ナル・テヤの場面による使い分けに関係のある条件
4. 方言体験に関係のある条件

6. ナルを変えたもの

1. 言語学的要因
2. 社会的要因
3. 心理学的要因

図と表

1. はじめに

従来、我が国における方言の変容に関して、現象記述的な研究は数多くなされてきたが、その原因追及はほとんどなされていない。方言がどのように変わり、また、なぜ変わるかということは、方言学の問題であるとともに社会言語学^(注1)の重要な課題でもある。

方言の変容は、単にことばだけの変容ではなく、そのことばを使用している人間の言語行動の変容である。そして、人間行動の変容の背景には、常に社会的な要因が作用している。それゆえ、方言の変容を説明するためには、言語学のみならず、社会学や心理学の立場からのアプローチも必要になってくる。ここで試みようとした社会言語学的な視点とは、方言の変容をことばだけに限った問題としてではなく、方言が使用されている地域社会やそこに居住する人々の社会生活との関連において捉えようとしたものである。

特に、方言変容の過程で社会生活上重要な位置を占めるのが、敬語と方言コンプレックスの問題である。^(注2)^(注3)

敬語の発達した日本では、方言による敬語の相違というものは、単に意思の疎通を阻害するだけではなく、それが原因となって相互の間に誤解や感情的な軋轢を生む可能性をも秘めている。敬語というのは、他の語彙や文法、音韻等に比べて対人関係上きわめて重要な役割を演じている言語要素なのである。本研究で対象としたナルやテヤも敬語という点で同様の特性をもっている。

また、方言が特定の地域もしくは社会集団のことば

であるということから、そうした地域や社会集団に対する劣等感がことばへも投射され、それが方言コンプレックスを生んでいると考えられる。そして、このような方言コンプレックスは、方言に対してだけではなく、その方言を使用している自己に対する劣等感にもつながるといって人々の社会生活の上に大きな影を投げかけている。方言コンプレックスは、方言変容の過渡的現象であって共通語化が進めばやがては消失するものと考えられるが、方言が及ぼす一番きわだった心理的な問題として今日的な意味で考察しなくてはならない。

ところで、方言の変容といえは、方言の共通語化という方向だけで捉えられがちであるが、ある方言から別の方言への変容という形でも存在する。ここで分析したのは、方言の共通語化ではなく方言から方言への変容であるが、方言変容ということでは同質の言語現象であると考えられる。むしろ、マスコミや学校教育の影響を捨象できるという点では、より少ない条件の中で方言変容の本質に接近できる可能性があるともいえよう。

本研究は、以上のようなことを踏まえて、京都府綾部市上林^{（注4）}という一つの地域社会におけるナルからテヤへの方言変容に実証的な検討を加えたものである。

調査はすべて1978年6月から8月にかけて行った。

2. 上林の社会的特色

1. 地理と歴史の概要

綾部市は、京都府の北部にあって、福知山市の東部、

舞鶴市の南部に位置している。また、綾部市内で単に「綾部」といえば、市の中心地域である旧綾部町を意味する。(図1)

上林とは、綾部市の東部、由良川の支流上林川の流域一帯を指す。上林は、東の方から奥上林、中上林、口上林の三つに大きく区分される。^(註4)これは、町村合併以前の旧村の名称に從ったものである。上林は、東西約20km、南北約15kmであり、綾部市全体の面積の約44%を占めているが、人口は少なく約5,000人(昭和50年)で、市全体の11%余りである。(図2)

交通は、上林川に沿って、幹線道路として府道綾部＝小浜線が東西に走っており、その北へ向う支線が、口上林からは黒石峠、中上林からは菅坂峠を越えて舞鶴へぬけている。しかし、上林からの人や車の移動は、綾部方面との往来が中心であって、舞鶴や小浜へ向うものはそれに比べるとわずかである。民営バスも運行しているが、上林と綾部を結ぶ路線だけで、舞鶴や小浜と結ぶ路線は開通していない。

耕地は、上林川とその支流の流域に樹状に広がっているが、地域のほとんどは山林である。また、人家も耕地と同様に上林川とその支流沿いであって、その多くは集村を形成している。

農村の形態としては、福武〔1971：pp. 156—159〕のいう、先進地型(西南型)村落に属し、本家・分家というような上下の身分関係はほとんどなく、一戸当りの耕地面積は少ない。産業は、農林業を中心しているが、兼業化が進み、綾部や舞鶴に勤めに出ている者も多い。上林も他の農村の例にもれず、青年層を中心に離村、離農が進んでいて、典型的な過疎地域となっている。

次に、上林の歴史的な変遷を概観することにする。過去の史料が乏しいので正確なことは分からないが、上林は、京都・奈良という都に近く、また、大陸との交流があったと思われる日本海にも近いという関係で、かなり早くから開けていたと考えられる。

既に平安前期の藤原時代には、奥上林の君尾山光明寺の坊舎が72を数え、寺領が全上林に及んだと史実にある。これだけ大きな寺院が当時の上林に存在していた理由としては、この時代の上林は、丹後、若狭と京都を結ぶ陸上交通の要地をなして、そのために中央の目にもとまりやすく、京都の権門勢家との結びつきも強かったからと考えられる〔福井、1956：pp. 27—28〕。

明治以前の交通の主体はあくまで人の脚であって、そのために多少の難路や急坂も厭わずに最短距離を求

めた。そのことが、上林を奈良、平安期から中世、近世に至るまで、丹後、若狭と京都をつなぐ交通の要所とした大きな理由だと考えられる。「丹波大絵図」(1799)は、上林内の一里塚がよく整備されていた事実を示している。

綾部市の中西部ではテヤが発達し、上林ではナルが使用されたことには、明治以前の交通路の影響による文化圏の相違が大きく原因していると思われる。綾部は、由良川という河川交通を中心として、福知山等と深く結びついていたのに対して、上林は陸上交通によって丹後、若狭と緊密な関係をもっていたのではなかろうか。生活に欠かすことのできない塩の搬入経路を考えてみた場合、上林では、綾部を介して由良川河口方面から入手するよりも、直接、舞鶴、若狭へ出向いた方がはるかに距離的に近く、便利である。

地域の村落の形態をみるにつけても、中世の上林は多数の小村落に分かれ、市の中西部のように大村にまとめられることがなかった、という点で相違がある。この傾向は、江戸時代の領主支配の中にも引き継がれ、綾部市の中西部のほとんどが一大名に支配されていたのに対して、この地域は、耕地面積は少ないにもかかわらず、数領主があちこちに飛地をもつという、実に入り組んだ形で統治された。

廃藩置県によって、現在の綾部市は何鹿郡^{いかもと}と呼ばれたわけだが、それまでの長い歴史の中では、同じ郡内に属するといっても、由良川を中心とする中西部と、その支流である上林川を中心とする東部とでは、地域の社会的性格がかなり異なっていたことが窺われるのである。上林に現在残るナルは、こうした過去の地域差を反映した痕跡であるともいえる。

明治以後、上林の小村落は何度か合併を繰り返して、何鹿郡奥上林村、中上林村、口上林村の三村に分かれた。また、馬車や自動車による陸上交通の発達にとともに、道路が拡張・整備され、綾部との交流が盛んになって、丹後や若狭との往来は次第に廃れ、京都へ行くのにも山陰線が利用されるようになっていった。

戦後、1950年に、口上林村が何鹿郡内の綾部町を中心に他の数か村とともに合併して、綾部市となった。その後、1953年には町村合併促進法が制定され、1955年、西部の三か村とともに、中上林村、奥上林村も綾部市に合併した。

最後に、「方言調査」という側面から、この地方を取りあげた理由をまとめると、次の3点になる。

a. 特別に広くなく、一つの谷(上林谷)を中心に行っている。

- b. 外部から転任して来る人がほとんどいない。
- c. 筆者の出身地ということで、地域の実状に明るい。

2. 近年の地域変動

戦後の復興期を過ぎた後、1955年ごろからの飛躍的な経済成長は、日本の社会全体に大きな変動をもたらした。人口論的な観点からみれば、都会では人口の集中が進んで過密が叫ばれ、一方、農村部では人口の減少による過疎現象を生むことになった。京都府の北部、丹波山地の北側に位置する上林もその例外ではなく、近年、過疎化・離農化の波に洗われて大きく姿を変えようとしている。

まず、上林の人口の推移をみると、1955年に約8,500名あった人口は、1975年では約5,000名と減少の一途をたどっている。この人口減少の形態は、家族全員が家をあげて村を出ていく、いわゆる挙家離村による分は少なく、専ら青年層の離村によるものである。

また、上林の近年の変化というのは、単なる人口減少という表層的部分だけには留まっていない。地域の社会構造自体が大きく変化しているのである。そして、その原因には、農業が主から従に転換したという産業構造の変化が第一に挙げられる。

図3でわかるように、全体の農家戸数そのものは余り減少していないにもかかわらず、1955年頃は専業農家かなりの割合を占めていて第二種兼業農家はわずかであった状態が、専業農家から第一種兼業農家へ、そして、第二種兼業農家へと、それ以降、今日までの短期間に急速な変化をみせている。それまで農村であった上林が、農村ではなくなりつつあるわけである。

こうした、農業を主要としない方向への職業形態の変化によって、地域内部の状況は以前とは一変しつつある。

従来の農村は、単に同一地域に居住しているということからだけではなく、水田耕作のための共同作業、農業という同じ仕事に就いていることからの職業的連帯感等に支えられて、その地域ごとのまとまりにはかなり強固なものがあった。いわゆる、村落共同体を形成しているわけである。

ところが、近年の離農化というものは、農業を通しての地域の人々の結びつきを弱めてしまった。さらに、人口の減少によってもたらされた通婚圏の拡大は、地域から血縁関係に基づくつながりをも失わせつつある。このような中で、それまでの村落共同体は、崩壊の一步手前まで近づいている。その地域と一緒に住んでい

るということだけが、残された唯一の絆になってきたわけである。

植村〔1973：pp. 83—87〕の研究でも、現金収入を中心とする家計構造の変化と、「地域共同体」としての結束意識の変化が、人口急減地域における最も顕著な生活意識の変化として示されている。そして、共同体としての結束力の変化は、収入獲得手段の変化に伴っての地域内部からの崩壊によるものであると述べている。

離農化が進行しているということは、農外収入が増加しているということの意味しているわけで、現在、上林の人々は、現金収入を求めて農業以外の職業に従事している人が大部分である。

ところが、兼業農家が求める職場は上林の中では限られている。その結果、上林以外の地域へ勤めに出るということになる。つまり、兼業化の進行によって、それまで主に上林の内部だけに限られていた人々の交流が、上林以外の地域との間でも頻繁になってきたわけである。そのために、上林の人々の目が地域内部から外へ広く向けられるようになることもまた当然予想されることである。

このような上林と他の地域との交流促進に働いたものは、兼業化だけではない。道路の整備と自動車の普及も大きな役割を果たしている。自動車をもつことによって、上林の人々は、それまで一日がかりで往復していた綾部や舞鶴、さらには福知山へ通勤することも可能になった。モータリゼーションは、農村と都市との距離を大きく短縮してしまった。こうして、以前は朝起きてから夜眠るまで生活すべての場であった地域社会というものの、農村の人々の生活の中で占める比重が低下してきたわけである。

以上のように、近年の全国的規模での社会変動は、丹波の一農村である上林にも、かつて体験したことのないような大きな変化をもたらすことになった。それは、単なる人口の急減という表層的部分に留まるだけではなく、従来から維持されてきた社会構造そのものの変革をも迫ることになった。上林は、村落共同体（もしくはその連合体）としてまとまりをもった農業中心の地域社会から、外部地域との間にも緊密な交流をもち、同じ土地に居住するということだけを主な条件とする地域社会への脱皮を余儀なくされてきているのである。

3. ナルとテヤ

1. 地理的分布

「ナル」、「テヤ」は、ともに敬語の終止形である。どちらも活用するが、この論文の中では「ナル」、「テヤ」という形でそれぞれを代表させることにする。

ナル、テヤは関西地方に広く分布する絶対敬語の一種である。図4は、「書ク」という動詞に接続した場合の敬語の地域的な分布を示したものである。

これを見ると、書キナルは、京都府の丹後一帯から福井県若狭にかけて広く分布している。それに対して、書イテヤという形は、丹後南部から京都府の丹波全域にかけて広範囲に使用されている。ただし、口丹波では親愛語的性格をもって、敬語としては書カハルが用いられる〔奥村、1961：pp. 137—140〕。

その力関係は、舞鶴、綾部といった都市部を中心に丹後南部から丹波一帯にかけて盛んに使われているテヤの勢力は極めて強く、同じ丹波に属する上林はもとより、福井県若狭西部へもかなり入ってきている。また、口丹波（船井郡南部から亀岡市）においては、京都市で使われているハルが勢力を伸ばしている。^(注5)

ところで、図4では、綾部市上林（図1の太線で囲んである地域）でもテヤが使用されていることになっているが、これは調査地点が少ないにもかかわらず行政区分に従って未調査地域の方言を推定した結果であって、上林では、今日でもなおナルが使われている。

本研究では、まず、上林におけるナル使用地域を確定するために、テヤの使用状況とあわせて、上林とその周辺でその土地出身の老年層を中心に面接調査を行った。

奥上林と中上林では小・中学生の間でもまだナルが使われていることがはっきりしていたため、調査地点は、口上林と舞鶴市与保呂、黒部および福井県大飯郡大飯町川上である（図2参照）。舞鶴市与保呂、黒部は上林に隣接しているが、上林との地域的な交流は現在ではほとんどない。また上林と大飯町川上方面との交通量は近年増加しているが、歴史的・文化的な繋がりは弱かったと考えられる。また、福井県（若狭）に入ると、方言は京都府とは大きく趣を異にしている。

調査の結果、口上林の忠町では、老年層においてのみ一部で現在もなおナルの使用が認められた。しかし、それ以外の口上林の地域ではテヤが支配的であってナルの使用は確認されなかった。このことから、口上林の忠町以東の上林の地域では現在もナルが使用されているが、それより西では専らテヤが使われていると推

定される。

舞鶴市では、与保呂で老年層の一部にナルが残っていることが認められたが、黒部ではナルは現在全く使用されておらず過去に使用された形跡も認められなかった。

また、大飯町川上では、ナルのほかにもそれよりも古い形である「ンス」（例：書カンス）も存在していたが、やはりこの地域にも若い世代を中心としてテヤが広まってきている。

これらの地域へのテヤの伝播の経路としては、テヤの分布や行政区分および交通を考慮すると、それぞれ下流の方から別々のルートで入ってきたものと考えられる（図5）。

2. 言語的特徴^(注6)

次に、ナルとテヤの言語的特徴を述べておく。

ナルは、ハルと同系統の尊敬の助動詞であって、ナルから変化してきたと考えられる〔奥村、1962：pp. 280—281〕。ただし、ハルには命令形が欠けているが、上林で使われているナルには、命令形「ナレ」が存在する。

テヤは、ナルやハルとは全く別系統に属している。テヤは、「テ（助詞）＋ヤ（指定の助動詞）」という形をとっていて、動詞の連用形に接続する。また、テヤの過去形は現在形と著しく異なっていて「書イチャッタ」という形が一般に使われるが、地域によっては天田郡三和町のように「書イタッタ」となるところもある。

また、テヤは、共通語の中の丁寧語である「デス」と結合して、「書イテヤ」という表現の他に、聞き手に対して共通語を用いた敬語表現になる「書イテデス」という形をもっている。しかし、同じ丁寧語である「マス」とは結合しない。これに対して、ハルは、「マス」と結合して「書カハリマス」という形をもっている。

ところが、ナルは、「デス」や「マス」という共通語の丁寧語と結合する形を有していない。語源的にはハルと同系統であるから、「書キナリマス」という形をつくることは言語構造上可能であるが、少なくとも上林とその周辺においてはこのような表現形式は現実に存在しない。

このように、ナル、ハルとテヤは、後接する形式の点では異なっているが、身内尊敬用法において共通する機能をもっていて、同種の敬語として扱うことができる。

「身内尊敬用法」とは、他人に向かって自分の家族

のことを話す場合（その人物が話し手より目上であるならば）、尊敬表現を用いること〔加藤、1973：pp. 40—41〕であって、関西地方を中心として日本全国に広く分布している用法である。共通語では家族のことが話題にのぼった場合、尊敬表現を用いないことを正しい用法としているが、身内尊敬用法とはそれと真っ向から対立するものである。

これは、敬語体系の違いである。身内尊敬用法は、絶対敬語が使用されている地域で用いられる。「絶対敬語」とは、話し手と話題にしている人との関係を基準として敬語を使うものであって、ほかの人、たとえば聞き手が、話し手とどんな関係にあろうと左右されないことを原則とする。これに対して、共通語は「相対敬語」であって、話し手と聞き手との相対的關係によって、敬語の使い方が決まる。〔野元、1972：p. 156〕

ここで、身内尊敬用法にまつわる例話を二つ紹介して、ナルとテヤの特徴をもう少し具体的に説明しようと思う。

一つ目は、筆者の自宅の近所（ナル使用地域）であった話である。その家の息子は京都へ出ていて、そこで九州出身の女性を嫁にもらった。その嫁さんが夫と一緒にたまたま夫の生家である筆者の自宅の近所へ帰って来た時、夫の父親（舅）の在宅の有無を、訪ねて来た人に聞かれて「おらん」と答えたために、その舅がひどく立腹したという話である。その嫁さんは、たぶん共通語で「おりません」とか「いません」と答えたのであろうが、舅は、自分に対する尊敬表現の含まれていないその答えを、地元の方言である「おらん」に直訳して、何と尊大な態度をとる嫁かと腹を立てたものと思われる。舅にすれば、「おんなれん」とか、それを共通語に直訳した形の「おられません」というふうに答えてほしかったのである。

もう一つの話は、綾部市の西部（テヤ使用地域）でその土地で生まれ育ったある女性から聞いた話である。彼女は、以前、京都で暮らしたこともあり、共通語もかなり流暢に話すことができる。その彼女が嫁に来た当初、近所の人に共通語で受け答えしていたら、「あの家の嫁さんは、旦那さんを尻に敷いている」という噂がたったそうである。この噂は、妻が共通語を使ったために、話題の人物である自分の夫に対して尊敬表現が欠けていたことが原因している。

このように、ナルやテヤは単に敬語ということ以外に、身内尊敬語であるということ、その使用地域における日常の人間関係の上で極めて大きな役割を負っている。また、相対敬語としての共通語が絶対敬語の

地域へは容易に受け入れられないことが理解されると思う。それは、敬語体系が異なる場合、単なる語彙の切り換えだけではなく、体系そのものの変更、ひいては、それで表現される人間関係の変容をも求められるからである。

それまで身内に対して尊敬表現を用いていた者が、相対敬語である共通語をそのままの形で用いることには、その人物に対する敬意を損うような気がして抵抗がある。その結果、語彙は共通語から借用しても、体系としては絶対敬語のまま、妻が夫のことを「おられません」と言ったりするようなことがよく起こるのである。絶対敬語から相対敬語への変容ということは、それまで敬意を表わしていた身内に対して、敬意を表現する手段を失わせることになる。そして、それが、身内の目上の者に対する敬意自体の喪失感につながると考えることもあながち無理ではない。

ナルやテヤというのは、語彙から文法、音韻にまでわたる全言語要素の中のほんの一要素に過ぎない。しかし、少なくとも京都府の丹波から丹後にかけての地域では、人々の言語生活上極めて重要な位置を占めている。その明確な証左として、綾部市内でナルを使えば、他の言語要素とは関係なくそれだけで「上林弁」と言われたりする（4の5参照）し、テヤの使用が盛んな舞鶴市では、数年前から新しく始められた祭に、郷土の特色をよく象徴するものであるとして、テヤの過去形であるチャツを冠して「チャツ祭り」と名付けている。

4. 方言の使用状況と方言体験

それでは、上林においてナルやテヤがどの程度使われ、また、どのような人々からナルが失われてテヤに変わっていくのかをみるために、綾部市立上林中学校の生徒の父兄を対象として配票調査を行った。上林中学校の学区には、奥上林と中上林が属し口上林は含まれない。

調査対象者数163名、回収率100%、有効票163であった。場面による方言の使い分けに関する項目は、国立国語研究所〔1974：p. 35〕の鶴岡市での調査票を参考にした。

1. 調査対象者の全体的特色

この調査の対象者（被験者）の特色をフェイス・シート項目の結果から示すと表1のようになる。

上林では、その多くが兼業の方を中心とする第二種兼業農家であり、生計の中心が農業にはなっていない。

そして、兼業のための勤め先の半分以上は地元の上林(注7)である。これは、被験者の約半数が女性であったためであり、男性では上林の外へ勤めに通っている者も相当数いる。

被験者の77.3%は上林で生まれ育った者を配偶者としており、被験者の母親の77.3%、父親の87.1%が上林出身者である。嫁は上林以外からもらう傾向が幾分強いようであるが、婚姻は主に上林の中で行われていて、この地域だけで一つの割合にまとまった通婚圏を形成している。

また、これらのことより、家族単位での上林以外からの転入者は極めて少ないと思われる。

2. ナルやテヤの使用状況 (図6)

ナル使用者(時々使う、よく使う)は、全体の62.0%、テヤ使用者は全体の85.3%であることや、テヤをよく使用するの方がナルをよく使用する者よりその比率が高いことから、テヤの方が広く使われていることがわかる。

また、以前テヤを使用していた現在テヤを使用しない者(2名)が、ナルの使用をやめた者(37名)よりはるかに少ないことから、テヤが新しく上林に広まってきた方言であることがわかる。

さらに、全体の半数以上(56.4%)の92名が、ナルとテヤの両方言を使用している。彼らは、方言変容の過渡的現象の典型を体現している人々であり、彼らの言語生活の中では、ナルとテヤの間にコード転換(code-switching)が行われていると考えられる。

全体の内、11名(6.7%)がナルもテヤも使用しないと回答している。上林で十年以上も生活している場合、この地域の言語状況からして、ナルやテヤも全く使用しないと考えることができない。また、父兄の内11名もが、ナルもテヤも使用しない地域から最近上林に転任して来たということもありえない。その原因としては、質問文がよく理解されなかったことであろうが、その他に、方言に対する否定的な態度がこうした結果を生んだとも考えられる。

これから述べる結果は、言語使用の実態を正確に表わしているのではなく、あくまで被験者の主観的な自己認知によるものであることを断わっておく。(注8)

3. 子供の時の使用方言 (表4)

子供の時は、ナルを使用していた者が大多数を占め、このことから、テヤはその後、新たに習得された方言であることがわかる。

子供の時にテヤを使用していた者のほとんどは、上林以外のテヤ使用地域で生育した者であると思われる。

4. ナルとテヤの場面による使い分け (図7)

家族や近所の顔見知りの中では、ナルやテヤはともにかなり盛んに使用されているが、市内の顔見知りでない人や、旅の人になるとその使用頻度は大きく下がる。方言を使うか否かの決定条件の一つとして、話をする相手が知己であるかどうか強く影響していることがわかる。知らない相手に対しては、方言は用いられない傾向がある。

特に、顔見知りでない人に対しては、テヤに比べてナルの使用は極端に少なくなっている。テヤは、綾部(注9)市内では地域共通方言ということで使用される場面も広いが、上林だけの方言であるナルの使われる場面は限られているわけである。しかし、このようにテヤが汎用されるのも、上林ではナルのあるところへ新しい威信方言として取り入れられたためであって、従来からテヤが使用されている地域では、市内の人に対してでも顔見知りでない場合、その使用頻度はもっと低いと考えられる。

5. 方言体験

これは、「あなたは今までに、自分が使った方言について何か言われたことがありますか。何か言われたとき、それはどんな内容でしたか」という項目と、「あなたは今までに方言を使って、恥しい思いをなされたことがありますか」という質問項目の結果である。

約半数の人が、方言を使って、何か言われたり恥しい思いをした体験をもっている(表5)。回答する時に思い出せなかったり、すっかり忘却している者、そして、こうした不快な体験を抑圧している者の数を加えるならば、その実数はもっと多いことが予想される。

言われた内容は、表6に示した通りである。ナルやテヤについての質問を続けてきた後の項目なので誘導的になっている点もあろうが、その内容は、「上林やろ」、「上林弁」というようなナル使用地域と結びついた指摘や、ナルを使ったために「笑われた」「真似された」というような、ナル使用に原因したものが圧倒的に多く、合わせると全体の62.3%にもおよんでいる。(注10)

MacIver & Page (1948: p. 28) は、「コミュニティへの愛着の最たる表われは習俗、つまり地域性を特徴づける行動様式である。なかでも地方による言葉の違いが、おそらく集団を区別する最もすぐれた指標であろう。コミュニケーションが地域の壁を越えて拡大

するにつれ、極端な言葉の相違は消失しつつあるが、言いまわし、慣用語、独特の用語、あるいは言葉づかいの違いによって、地方をいいあてることができる。」と述べているが、「上林やろ」とか「上林弁」という表現には、まさにこのことが当てはまる。ナルを使用することが、上林の人の地域に対する愛着の表われとはいえないが、綾部市内の他地域の人々にとっては、ナルは上林の人だと判断するための重要な指標となっている。

ただし、ここで問題なのは、上林の人が自分達の方言を指して「上林弁」と呼ぶことはまずないということである。筆者は今までに、上林の人が地元の方言を他地域の方言と区別するために、「上林弁」というような言い方をしているのを聞いたことがない。Burling〔1970 : p. 139〕は、人は、自分の方言に名前をつけることによって、自分がどの社会集団の一員であるかを示すのである、と述べているが、この場合は全く逆で、その方言を使用する集団に属さない者が方言に名前をつけているわけである。これには、その方言を話す者は自分たちの集団の一員ではない、というようなニュアンスが込められている。一種の「よそ者意識」の表出として、外部の言語共同体(注11)の方言に名前がつけられていると解釈できる。上林弁の「弁」には、「田舎の方言」というような意味合いが込められていると思われる。それを示すものとして、ナルを上林弁と呼ぶ人達も、自分達の使っているテヤを「綾部弁」とか「丹波弁」などとは決して呼ばない。上林の人達が上林の方言に名前をつけなないと同様に、綾部の人達も綾部の方言に名前をつけることはない。

さらに重要なことは、方言に対して言われた内容は、出身地や方言名の指摘だけに留まるのではなく、明らかに嘲笑や侮蔑の感情を含んでいるものが、かなりの比率(41.0%)にのぼるということである。また、出身地や方言名の指摘にも軽侮の感情が全く含まれていないとはいえない。

上林の人がこうした体験を最初にもつのは、多くの場合、中学校を卒業して進学や就職のために外へ出ていく青年前期の一番感受性の鋭い時期である。そうした時期に、自分の使ったことばが笑われたり真似されたりすることは、本人にとっては心理的な外傷体験に匹敵するような事件であると思われる。まさに「方言外傷」といえよう。たとえ方言外傷には至らなくても、方言コンプレックスを抱かせるには十分な体験であると思われる。そして、このような体験がその人の方言評価や、以後の言語行動に相当大きな影響を

与えていることには、疑問の余地もない。

最後に、相手の使っている方言を冗談半分に真似してみたり、軽蔑したり、嘲笑したりするという行為は、方言を使う者が方言を使う者に対して行っているのである。方言に対するこのような態度や行動というものは、何も共通語使用者の立場からなされるだけではなく、より優位な方言使用者(より優位な言語共同体)からより劣位の方言使用者(より劣位の言語共同体)に向けてなされる日本では一般的な現象であるといえよう。また、それゆえに、方言を考える場合、単に共通語との関係で捉えるだけではなく、周囲の方言との相互関連も含めた上でみていく必要がある。

5. 方言変容の条件

これは、前述の方言使用や方言体験の項目について二重クロス分析を行い、方言変容はどのような個人的条件(属性)に基づいて起こるかを検討しようとしたものである。分析は、二重クロス集計の相関表より、ナルとテヤの使用についての項目はカイ自乗検定とメディアン検定、他の項目にはカイ自乗検定を用いて、5%以下で有意差の認められた条件についてののみ記載し、考察を加えた。

検討を加えた条件は、次の通りである。

i. 自然的条件

(ア) 性(男性—女性)

(イ) 年齢(30歳代—40歳代)

ii. 生育・経歴的条件

(ア) 学歴(低学歴—中・高学歴)(注13)

(イ) 職業(専業農家・第一種兼業農家—第二種兼業農家)

(農家—非農家)

(ウ) 在外歴(あり—なし)

(中丹地区内—中丹地区外)(注14)

(ニ) 配偶者の出身地(上林内—上林外)

(オ) 母親の出身地(上林内—上林外)

(カ) 父親の出身地(上林内—上林外)

iii. 社会的・環境的条件

(ア) 居住地域(奥上林—中上林)

(イ) 兼業の勤務先(上林内—上林外)

(ウ) 綾部へ出かける回数(月平均)

(0—3回—4回以上)

(ニ) 認知的社会階層(上層—中下層)(注15)

iv. 方言に関する条件

(ア) ナル使用(あり—なし)

(イ) テヤ使用(あり—なし)

- (ウ) テヤ使用頻度(時々よく)
- (エ) 子供の時の使用方言(ナルーテヤ)
- (オ) 方言について言われたこと(ありなし)
- (カ) 方言で恥しい思いをしたこと(ありなし)
- (キ) 方言態度(共通語使用主義—二方言併用主義)

V. 社会的態度

- (ク) 上林に(残る—残りたくない)
- (ケ) 娘を上林に(嫁がせる—嫁がせない)
- (コ) 長男(長女)を上林に(残す—残さない)
- (カ) 伝統文化に(保護的—非保護的)
- (オ) 教育環境としての上林では(不安—不安なし)

また、これらの条件間の相互関連をみるための検定(カイ自乗検定)も同時に行った。

1. ナル、テヤの使用に関係のある条件

- (A) ナルを使う傾向が強いのは……

男性
 父母が上林出身
 子供の時にナル使用

(方言について言われた
 方言で恥しい思いをした)

- (B) テヤを使う傾向が強いのは……

女性
 認知的上層階級

これらの条件のうち、「方言について言われた」と「方言で恥しい思いをした」との間には関連があり一つのカテゴリーに含まれるが、他の条件は各々独立している。

まず、性別による歴然とした差異が目につく。これをもう一步押し進めて、男女別のテヤ使用状況の違いをグラフに表わす(図8)と、女性の方がテヤを使う傾向が強いことが一層明瞭になる。女性のテヤ使用の曲線は、Allport [1961: pp. 84—86] が仮定した、同調行動のJ曲線をゆるやかに描いている。このように、新しい方言であるテヤは、女性の方が早く取り入れていることがわかる。

Trudgill [1974: pp. 111—113] は、女性の方が地位の高い変種や全国的な標準語形の方に向って変化を起こすことの原因として、女性の特色としての「正しさ」が重要な働きをなすためであろう、と考えている。そして、その条件としては、女の方が男より「正しい」行動を期待される社会であることが挙げられている。日本でも、女性が男性よりも正しい行動をすべきだ、というような期待、もしくは、社会規範が存在していると考えられるから、女性がいち早くテヤを取り入れ

ることの説明として、女性に求められる「正しさ」が原因しているといえる。

これを裏づけるものとして、国立国語研究所が1964年に行った敬語意識に関するアンケート調査では、女性は男性よりもていねいな敬語を使うべきだ、という回答が多数を占めている〔渡辺, 1972: p. 151〕。上林ではナルよりもテヤの方がていねいだと評価されている(表8)から、女性がよりていねいな敬語を使うべきだという期待や規範が社会的圧力となって、テヤの使用を促していると考えられる。

次のナル使用傾向の強い者の両親は上林出身であるということは、ナルを使うか否かには生まれ育った家庭の言語環境が大きく影響していることを示している。別の見方をすれば、両親が上林以外の出身である場合にはナルを使わない——つまり、テヤを捨ててまでナルを使用するようにはならない、ということである。この結果からも、テヤというのは、その人の生活歴の中で新たに習得された方言である、ということができる。

また、ナルを使う傾向が強い者に、自分の方言について何か言われたり、恥しい思いをしたことが多いというのは、上林以外の地域へ行ってナルを使ったことがその主な原因と思われる。ナルというのは方言の中の一要素に過ぎないが、それがいかに大きな方言識別の指標になっているか、ここにも現われている。

ところで、このような方言コンプレックスを抱かせる体験がナルを使用する傾向の強い者に多いというのは、方言コンプレックスをもっているも方言の使用傾向は変わらない事実があるようにみえるが、方言を使って何か言われたり恥しい思いをした体験は、ナルを使用した経歴のある者、そして、今も使用する者に多いのであって、ナルを使用する頻度が高い者に多いわけではない。つまり、ナルを使用したことがない者には、方言コンプレックスを抱くような体験が少ないということを意味している。

ナルの使用頻度までも問題にしたメディアン検定の結果では、上記の二つの体験の有無の間に有意な差はなく、有意差が認められたのは、ナルを「以前使った、今も使う(時々、よく使う)」グループと「使ったことがない」グループとの間のカイ自乗検定の結果においてであったことを断っておく。

図9に示したように、ナルの使用頻度は、むしろ方言について言われたことのない者の方が高い。特に、方言について言われた者には、以前はナルを使用していた現在は使わない者が、言われなかった者のそれに

比べて格段に多い。方言コンプレックスが、方言変容の原因の一つになることを示唆している。

最後に、認知的社会階層と方言変容の関係について、少し詳しく見てみることにする。

図10に示されているように、認知的上層階級の方がテヤ使用が進んでいる。また、図11からわかるように、上層階級の者は、中下層階級の者に比べて、以前ナルを使用していても現在では使用しない傾向が強い。認知的上層階級は、テレビを早く購入した（と思っている）のと同様に、ナルを捨てて、いち早くテヤを取り入れているわけである。とにかく、彼らは、新しくて権威があると判断されるものには、地域の中で一番早く同調する人々なのである。

社会階層と言語使用の関係については、Labov〔1970：pp. 191—199〕の面白い調査報告がある。彼は、ニューヨークで調査を行い、その地域で権威のある母音の後の/r/の発現状況を、五つの場面によって観察している（図12）。横軸の右側へ行くほど堅苦しい場面になって、自己の使用言語によく注意が払われるようになる。

階層が上になるほど、そして場面が堅苦しくなるほど/r/の発現頻度は高くなるが、その中で、下層中流階級だけは、途中から上層中流階級よりも/r/を多く用いるという、特殊なパターンを描いている。

これは、過剰訂正（hypercorrection）と呼ばれ、上から二番目という不安定な地位にある下層中流階級が、目標としている上層中流階級に少しでも近づいて、より有利な社会的地位を得ようと奪闘しているためだ、と説明される〔Fishman, 1972：p. 59〕。

このLabovの調査との比較を試みるために、後の第3節と関連することだが、場面によるナル、テヤの使い分けの状況を検討してみることにした。その結果、本調査のグラフにも興味深い傾向が現われている（図13、14）。

上林では権威のあるテヤに対して、認知的上層階級は、家族や近所の顔見知りという親しい人を相手にしたくつろいだ場面では、中下層階級よりもテヤをよく使うが、知己でない人を相手にした堅苦しい場面ではテヤを使うまいとする傾向がはっきりと現われている。ナルについても類似した傾向があり、上層階級では、旅の人に対してナルを使用すると答えた者は一人もいない。

本調査での認知的上層階級をLabovの調査の下層中流階級と同じものとして扱うことはできないが、親しい人を相手にする場面では上林で権威のあるテヤを

多用し、共通語使用が望まれるような場面では、中下層階級よりもすばやくテヤを捨てるといふ、彼らの言語生活に対する並々ならぬ努力が感じられる。

2. 子供の時の使用方言と関係のある条件

(A) ナルを使用した傾向が強い者は……

母親が上林出身

現在ナルを使用

(B) テヤを使用した傾向が強い者はこの逆で……

母親が上林外の出身

現在ナルを使用せず

現在のナル使用については、両親が上林出身であるということがその条件であったが、子供の時のナル使用では、母親が上林出身ということだけが条件となっている。子供の言語形成においては、母親の使用する言語の影響が強いことがこの結果からわかる。これは、父親よりも母親の方が子供に接する機会が多いためと考えられる。母親が、子供の言語環境の中では大きな位置を占めているのである。

3. ナル、テヤの場面による使い分けに関係のある条件

(A) ナルについて

○対家族でナルを使う傾向が強い……

（農家

両親ともに上林出身

方言について言われた

○対近所でナルを使う傾向が強い……

※関係ある条件はなかった

○対市民でナルを使う傾向が強い……

上林から出たい

○対旅人でナルを使う傾向が強い……

方言で恥しい思いをした

上林から出たい

伝統文化に非保護的

(B) テヤについて

○対家族でテヤを使う傾向が強い……

女性

ナルを使用しない

テヤをよく使用する

○対近所でテヤを使う傾向が強い……

女性

ナルを使用しない

テヤをよく使用する

二方言併用主義

上林に残る

伝統文化に保護的

○対市民でテヤを使う傾向が強い……

上林に教育上の不安なし

○対旅人でテヤを使う傾向が強い……

上林に教育上の不安なし

「対家族でナルを使う傾向が強い」という条件の中に、農家ということが含まれている。これは、上林で非農家というのが、両親が上林以外の出身であったり、配偶者が上林以外の人であったりする傾向が強いため、農家というのは、両親が上林出身ということで代表することができる。

質問項目の中の会話の場面は、話し相手とどんな関係かということで、親疎二つの場面に分かれる。家族や近所の顔見知りという親しい間柄の人に対面している時と、市内の顔見知りでない人や旅の人という疎遠な人に対面した場合である。そして、その会話場面の雰囲気としては、親しい人を相手に話している時はくつろいだ (casual) 気分であり、面識のない疎遠な人とは堅苦しい (formal) 気持ちを与える。

場面が親疎二つに分かれるということは、そこに現われた条件の質的な違いとして、調査結果の中にも反映されている。

まず、対家族、対近所という親しい人相手のくつろいだ場面では、ナルの場合、両親が上林出身で、方言について何か言われた経験があるということがその使用を強める条件であり、他方テヤの場合は、女性であること、ナルを使用せずテヤをよく使用することがその使用を促がす条件となっている。これは、第1節で見たナルやテヤを使用する傾向に作用した条件とほとんど同じである。

ところが、対市民、対旅人という見ず知らずの人に対面した堅苦しい場面になると、ナルの場合共通してあるのは「上林を出たい」、テヤの場合は「上林に教育上の不安がない」という両者ともに上林に対する社会的態度がその使用傾向を高めている。これは、親しい人相手の場面で現われたものとは全く異質の条件である。

このことから、ナルやテヤの使用傾向には、それらが、親密な関係にある人との会話場面で使用されるかどうかということが強く係わっていて、面識のない人に対して用いられるかどうかということとは直接的な関係はないと言える。つまり、ナルもテヤも方言ということで、生活語としての特色を備えているわけである。

4. 方言体験に関係のある条件

○方言について何か言われた……

方言で恥しい思いをした

上林に教育上の不安あり

認知的上層階級

在外歴あり

○方言で恥しい思いをした……

方言について言われた

「方言について何か言われた」という条件と「方言で恥しい思いをした」という条件とは関連があり、方言について言われた内容の多くは、本人にとって恥しい思いをさせるような事柄であったと考えられる。なお、上林に教育環境として不安があることと認知的上層階級とは関連がなく、相互に独立した条件である。

まず、認知的上層階級は、方言について何か言われた体験を多くもっているわけだが、これは、言われたことをよく記憶しているということではないかと考える。上層階級を準拠集団としている人は、権威的で割合に外聞を気にする人であると思われる。それだけに、自分が方言を使ったことで何か言われたような体験が、鮮明な印象として残っているのではなかろうか。

また、在外歴のある人に、方言について何か言われた体験が多いのは当然のことであるが、それで恥しい思いをしたかどうかについては、在外歴のない人との間に有意な差がない。これは、方言を使って恥辱感を抱くのは、何も外部の地域に居住しなくても、外部へ出かけて行ってそこで方言を使えば起こるし、さらには、その地域内においても起こりうることを示している。方言使用による恥辱の体験は、異種の方言が接触する場においては、常に生まれる可能性があるといえよう。

6. ナルを変えたもの

本研究で解明を試みようとしている方言変容の要因を考えた場合、それは大きく三つに分かれる。まず第一に、方言自体の特色、もしくは、その方言の言語としての特性に基づくと考えられる言語学的要因である。時代とともに、人間の文化や社会の様々な面が絶えず変化しているが、これは、その言語としての特殊性といえるものである。第二には、言語を使用する人間の所属している文化や社会の影響による社会学的要因である。そして、この社会的状況の変化というものが、文化の一形態でもある言語に一番強く作用していると考えられる。第三に、その社会学的要因が、言語変容への媒介変数のような形で存在する人間に対して

どのような力を及ぼしているかという心理学的要因である。つまり、言語変容をより人間的レベルで説明しようとした場合、問題にされなければならないことである。

1. 言語学的にみた要因

まず第一に挙げられることは、テヤがナルと同じ絶対敬語であり、身内尊敬用法として使用されているということである。ナルとテヤの言語的類似性である。ナルとテヤは、後接形式等には相違があるが、身内尊敬用法という点において両者が共通であることが、ナルからテヤへの変容を可能にした基本的条件である。

次に挙げられるのが、テヤには共通語の「デス」と結合した形があって、ナルよりも汎用性があるということである。聞き手に対する敬意を、方言形を用いず共通語形を用いて表現できるところがナルにはない特徴となっている。これに対して、ナルには共通語の中の丁寧語と結合する用法が存在しないわけであって、そのことが、ナル使用者にテヤの受容を促す一つの有力な原因になっていると考えられる。

さらに、見落してはならないこととして、ナルやテヤは極めて使用頻度が高い言語要素であるということが挙げられる。

毎日、何人かの人と接して暮している限り、上林では、ナルやテヤを使わずに一日を終わるということはずまずありえない。誰かのこと(それは聞き手でもよい)が話題にのぼれば、話し手は多くの場合、身内尊敬語を使うことになる。それだけに、ナルとテヤの言語的な接触頻度も極めて高いといえる。このことも、ナルからテヤへの変容を容易にしている一因である。

2. 社会学的にみた要因

ナルからテヤへの方言変容は一種の文化変容であり、こうした文化変容が起こる背景には、社会・経済的变化がそれに先行して存在していると考えられる。ここでもう一度、近年の上林における地域変動を振り返り、それがいかなる形で方言変容を生起せしめるに至ったかを考えてみることにする。

上林の歴史を説明する中で既に触れたように、従来、上林は綾部市の中西部とは構造的に多少異なった社会をつくっていた。そして、当時の上林と何鹿郡の中西部との交流は、現在ほど活発ではなかったと思われる。また、近隣の都市の勢力という点でみた場合、上林は、綾部という都市の勢力圏にしっかりと組み込まれてはいなかった。

ところが、1950年と1955年の町村合併によって、上林は、まず行政圏において綾部という都市の影響を強く受けるようになった。綾部は、行政サービスを通して、名実ともに綾部市の地域的中心地としての機能を果すようになったわけである。上林のもつ地域的な独立性というもの、まず行政的機能から失われていった。しかし、この時点ではまだ、上林の人々は、農業を中心に生計を営んでいて、綾部との頻繁な行き来はなかったと推測される。

その後の日本経済の急速な成長というものは、全国的規模での社会・経済変動を生むことになった。

上林でも、農業の機械化や化学肥料、農薬の使用が進み、そのために現金収入を求めることが、結局は、農家の兼業化を促進する結果になった。特に、一戸当りの耕地面積が少ないことや冬期の降雪、さらには、市場への距離が遠いこと等の上林の農業をとりまく諸条件の悪さは、人々を急速に農業から遠ざけてしまった。その一方で、就学を終えた青年層の流出が続き、上林は、離農化、過疎化というかつてない大きな地域変動を経験することとなった。

このような中で、生活の都市化が進み、道路が整備され、自動車が普及するようになると、経済的にも綾部と密接な関係をもつようになった。人々は、買い物にも綾部へ気楽に出かけるようになり、毎日、上林と綾部の間を通勤することも可能になった。また、商業化の波に乗って、綾部方面からの人々の出入りも増加してきた。ここに至って、経済的な面においても、上林は完全に綾部の勢力圏に入ったのである。

そこで当然生まれてくる人的交流の繁化というものは、ナルとテヤとの接触頻度を高めることになる。そして、地域間の交流の促進ということは、相対的に威信方言となってテヤの上林への普及をも促進することになった。この段階で、上林は、文化圏においても、綾部の勢力範囲に属することになったわけである。

つまり、外的には、行政圏、経済圏において綾部の強い影響を受けるようになり、内的には、兼業化、過疎化ということで地域的な結束力が弱まり、それまで維持されてきた、村落共同体の連合体を基盤とした上林という地域共同体は、崩壊の道を歩むことになったのである。その結果、ナル言語共同体の解体が始まり、上林もテヤ言語共同体の一地域に変わってきたのである。^(注16)

上林におけるナルからテヤへの変容というものは、それだけ独立して進行しているのではない。近年の上林という地域社会の大きな変動を背景として、それを

具現するかのように、ナルという方言が失われつつあるのである。

3. 心理学的にみた要因

方言は、人間から全く独立した存在ではない。人間の言語行動に伴って、現われるものである。それゆえ、方言変容は、行動変容である。社会環境の変化によって、従来の行動様式では適応できなくなったために、新たな行動様式が学習され、それが行動の変容、つまり、方言の変容を招いたと考えられる。ナルからテヤへの変容というのも、上林の人々の言語行動の変容である。

方言変容の心理学的要因としては、方言コンプレックスに基づく補償によるものと、同調行動によるものとの二つが仮定される。ただし、この場合、同調行動の作用因となる社会的圧力というものは、同時に、方言コンプレックスの原因としても作用していると考えられる。

まず、上林の人がナルを使って、「上林弁や」とか「上林やろ」と言われたり、笑われたり口真似されたりすれば、多くの場合、恥辱感や被軽蔑感を抱かないわけにはいかない。甚しい場合には、それは心的外傷にも匹敵する体験である。その結果、いわゆる方言コンプレックスを生むことになる。また、方言コンプレックスは、何もこのようにはっきりしたことばや動作で示されなくても、聞き手の軽蔑したような態度だけでも充分であるし、話し手が主観的に自分の使っていることばを劣位のものだと感じるだけでも生起する。

そして、このようにしてナルに対する方言コンプレックスを抱いた者は、その補償としてテヤを使おうとするようになる。自分の方言に対する劣等感を克服するために、それまでの言語行動を変えるわけである。

しかし、すべての人がナルに対して劣等感をもつわけではない。ところが、そうした人達も徐々にテヤを使うようになってきている。

それは、テヤが地域共通方言として上林に広まってきたからである。テヤが地域共通方言として、言語使用上の一つの規範をなしていることが、社会的圧力と

して作用しているのである。テヤを好むと好まざるとにかかわらず、一つの社会規範に従うという形で、テヤ使用という同調行動が起こるわけである。また、上林の人のうち、テヤを使うことによってテヤ使用地域（テヤ使用社会）への帰属意識を感じている人、つまり、テヤ使用地域（テヤ使用社会）を準拠集団としている人においては、一層このテヤ使用という同調行動が促進される。上林が行政的にも経済的にもテヤ使用地域に組み込まれたということは、同調行動を促す強力な作用因として機能していると考えられる。

以上の心理学的要因をまとめて、簡単に図式化すると図15のようになる。

<付記>

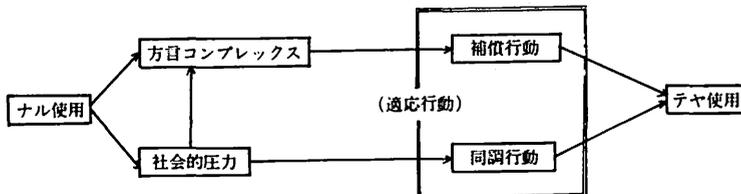
調査するにあたっては、上林中学校の村上肇学校長を煩わし、被験者のみなさんの協力を得ました。また、社会言語学、方言学に関することについては、国際基督教大学の星野命教授、および東京都立大学大学院の沖裕子、加藤和夫両氏から助言を受けました。お世話になった方々に篤く感謝致します。さらに、ここまで研究を進めてこられた裏には、指導教官であった東京都立大学の詫摩武俊教授の御理解と御叱責があったことを記しておきます。

なお、本研究では、方言に対する優劣の判断の基準となると考えられる方言イメージと地域イメージの関係について、S-D法を用いた数量的な検討も合せて行ったが、その結果については別の機会に譲ることにする。

引用文献

Allport, G. W., 1961, The Nature of Prejudice, Addison Wesley Publishing company, Inc 原田達夫・野村昭(訳), 1968, 『偏見の心理』培風館
Burling, R., 1970, Man's Many Voices Holt, Rinehart and Winston, Inc 高原脩・本名信行(訳), 1974, 『言語と文化』ミネルヴァ書房

図15 ナルからテヤへの方言変容に関する心理学的要因



江川清, 1973, 「最近二十年間の言語生活の変容——鶴岡市における共通語化について」『言語生活』No. 257, 筑摩書房

Fishman, J. A., 1972, The Sociology of Language Newbury House Publishers 湯川恭敏(訳), 1974, 『言語社会学入門』大修館書店

福井秀雄(編), 1956, 「奥上林村誌」元奥上林役場

福武直, 1969, 「日本農村の社会問題」東京大学出版会

加藤正信, 1973, 「全国方言の敬語表現」『敬語講座第6巻 現代の敬語』明治書院

国立国語研究所, 1974, 「地域社会の言語生活——鶴岡における20年前との比較——」国立国語研究所

Labov, W., 1970, "The Study of Language in its Social Context" Pride, J. B. & Holmes, J. (ed), 1972, Sociolinguistics: Selected Readings Penguin Books

MacIver, R. M & Page, H., 1948, Society, An Introductory Analysis pp. 8—11, pp. 291—296 若林敬子・武内清(訳), 1973, 「コミュニティと地域社会感情」松原治郎(編)『現代のエスプリ No.68 コミュニティ』至文堂

野元菊雄, 1972, 「敬語の意識——関東弁・関西弁の敬語」『解釈と鑑賞』Vol. XXXVII—6

奥村三雄, 1961, 「方言の実態と共通語化の問題——2. 京都・滋賀・福井」『方言学講座第三巻 西部方言』東京堂

奥村三雄, 1962, 「京都府方言」榎垣実(編)『近畿方言の総合的研究』三省堂

Trudgill, P. 1974, Sociolinguistics: An Introduction by Peter Trudgill Penguin Books 土田滋(訳), 1975, 『言語と社会』岩波書店

植村勝彦, 1973, 「地域社会構造の変化に伴う住民の生活意識の変容——人口変動を指標として——」『年報社会心理学』No.14

渡辺友佐, 1972, 「敬語の意識——男女によって敬語はどうちがうか」『解釈と鑑賞』Vol. XXXVII—6

(注1) (社会言語学は,) 言語使用それ自体だけでなく, 言語への態度や言語および言語使用者に対する顕在的行動を含む, 言語行動の社会的体系に関連する問題の全領域に焦点をあてるのである〔Fishman, 1972: p. 3〕。

(注2) 敬語は, 疎遠な人とか優位な立場にある人に対して, もしくは, 公の席とか電話のような間接的

な場面でも使用される傾向があり必ずしも敬意を表わすものではない。何らかの心理的な距離感の表現であるといえる。

(注3) 方言コンプレックスとは, 方言に対する劣等感であるが, その内容は, 自己の使用方言に対する被軽蔑感や恥辱感から, それが原因で生じた感情的なしこりである劣等コンプレックスに至るまでの多様な心理現象を含んでいる。また, 方言コンプレックスは, 共通語に対してのみならず, より優勢な方言に対しても抱かれるものである。

(注4) 筆者は, 奥上林の老富町の出身である。

(注5) ハルは, 既にテヤ使用地域である綾部や舞鶴にも浸透していて, 青年層の女性を中心にかなり使用されるようになってきている。

(注6) ナルとテヤは次のような使い方がなされる(下線部)。

<ナル> 人物ア: おばあさんおんなるかい?

人物イ: おんなれん。

人物: どこへ行きなつたんやい?

人物イ: 買い物に行きなつたんや。おじいさんはおんなるけど。

<テヤ> 人物ア: おばあさんおってかい?

人物イ: おってない。

人物ア: どこへ行っちゃつたんやい?

人物イ: 買い物に行っちゃつたんや。おじいさんはおってやけど。

(注7) 意図的に男女半々になるように被験者を選定した。

(注8) このことに関して, 国立国語研究所の1971年の鶴岡市における調査では, 言語行動とその自己認知がどの程度一致するかについての調査も行われた。方法としては, まず, 旅の人と話をする時にはどんなことばを使うか, と質問しておいて, その後, 調査の一連の質問が全部終了したと思わせてから, 最後に, 「～さんのお宅はどちらでしょうか?」という質問をした(「道きき」)。そして, その結果(行動)と, 先に旅の人に話す時に使うと回答したことば(意識)とを比較したわけである。

結果は, 表2の通りであり, これにカイ自乗検定を試みて, 0.1%以下で有意差が認められた, という事より, 意識と行動はほとんど差がないと結論づけている〔江川, 1973: pp. 59—60〕。

しかし, 表2にカイ自乗検定を用いた結果には, 意識と行動にほとんど差がないと言い切るだけの説得力は存在しない。例えば, 表の中で, 旅の人に共

共通語で話すと言った人292名の内、実際の行動でも共通語を用いた人は、半数少しの148名であって、それだけからでも、意識と行動の間にはかなりのズレがあることがわかる。

これは、カイ自乗検定を用いる場合の帰無仮説が不明確であったための誤りと考えられる。この場合の帰無仮説は、「意識と行動の間には全く関係がない」であり、それが棄却された場合にいえることは、「意識と行動は関係がある」ということだけである。つまり、意識の上で共通語で話すと言った人は、方言と混ざることがあっても、実際の場面でも共通語で話す傾向が強く、方言で話すと言った人は、共通語と混ざったりしても方言を使うことが多いとはいえない。

表3は、表2をもとにして、意識と行動が一致しているか否かについて整理したものである。これにカイ自乗検定を試みると $\chi^2=1,869$ であり、 $\chi^2 < \chi^2_{.10}(2)$ ということになって、意識と行動が一致した者は、一致しなかった者より有意に多いとはいえない。さらにこの表からわかることは、意識と行動が一致しない者は、共通語とか方言という純形を答えた者に多く、中でも、権威のある共通語と答えた者は不一致率が一番高い。

このことから、自己の言語行動についての内省は必ずしも正確なものではないということになる。本調査の結果として得られたナルやテヤの使用状況というものは、実際の言語行動から全く掛け離れたものではないが、実際の言語行動そのものではないということをお心得ておかなければならない。

(注9) 共通語とは異なるが、ある地域全体に広く使われている方言。

(注10) 表6の「侮蔑、嘲笑、模倣」はほとんどナルについてのものであり、また、「その他」の中にもナルに関するものが含まれている。62.3%という数字は、表6から求めたものではない。

(注11) 本論では speech community の訳語として用いていて、共通の言語変種 (variety) を使用している人々の集団である。

(注12) 上林では、中学校まではテヤ使用地域との直接的な接触がなくても生活できるが、中学校を卒業すれば、高校へ進学する場合はもちろん、就職する場合にもその多くはテヤ使用地域へ出ていく。

(注13) 低学歴者とは、旧制の高等小学校、新制の中学校を卒業までの者、中・高学歴者とは、それ以上の上級学校を卒業した者を指す。

(注14) 中丹地区とは、綾部市、福知山市、舞鶴市等を含む地域を指し、主にテヤが使用されている。

(注15) これは、自分が上林の中でどの階層に所属しているかを、被験者自身に答えてもらったものである。その方法としては、被験者に直接所属していると考えられる社会階層を尋ねるのではなく、テレビ購入の時期を聞くことによってその代用とした。社会階層とテレビ購入の時期との関連については、必ずしも明確な根拠があるわけではない。特に、現在農村では兼業化や離農が進行していて、以前のように年間所得と所有財産との間には密接なつながりがなくなっている。テレビの購入時期は、どちらかといえば年間所得の方を強く反映していると考えられる。

テレビ購入の時期についての回答は、表7の通りである。

今回の調査の対象となった被験者の家庭は、上林の一般的な家庭を代表していると考えられる。だとするならば、テレビを早く購入した家と遅く購入した家の比率が等しくなければならない。しかし、結果は、テレビを早く購入した家の方がかなり多い。それゆえ、被験者が客観的な事実を述べているとは判断しがたい。この原因としては、テレビが普及しはじめたのが十数年以上も昔で、記憶が曖昧になっていることも考えられるが、早い方により多くの者が回答していることを見るならば、彼らは準拠集団を述べていると思われる。つまり、自分が所属していると認めている集団、もしくは、所属したいと願っている集団に回答しているわけである。

そんな理由で、テレビ購入の時期に関する項目を認知的な所属階層を問うものとみなして、早い方を「認知的上層階級」、中ぐらい、遅い方をまとめて「認知的中下層階級」と呼ぶことにした。

(注16) ナルやテヤは言語の中の一要素であってそれだけで変種とは言えないが、言語生活に占める比重の大きさから本論では変種と同格に扱い、ナルやテヤを単位とする言語共同体を仮定している。

酒井 充

1956年、京都府生まれ、東京都立大学人文学部(心理学専攻)卒業。現在、公立豊岡病院精神神経科勤務。

— 図 と 表 —

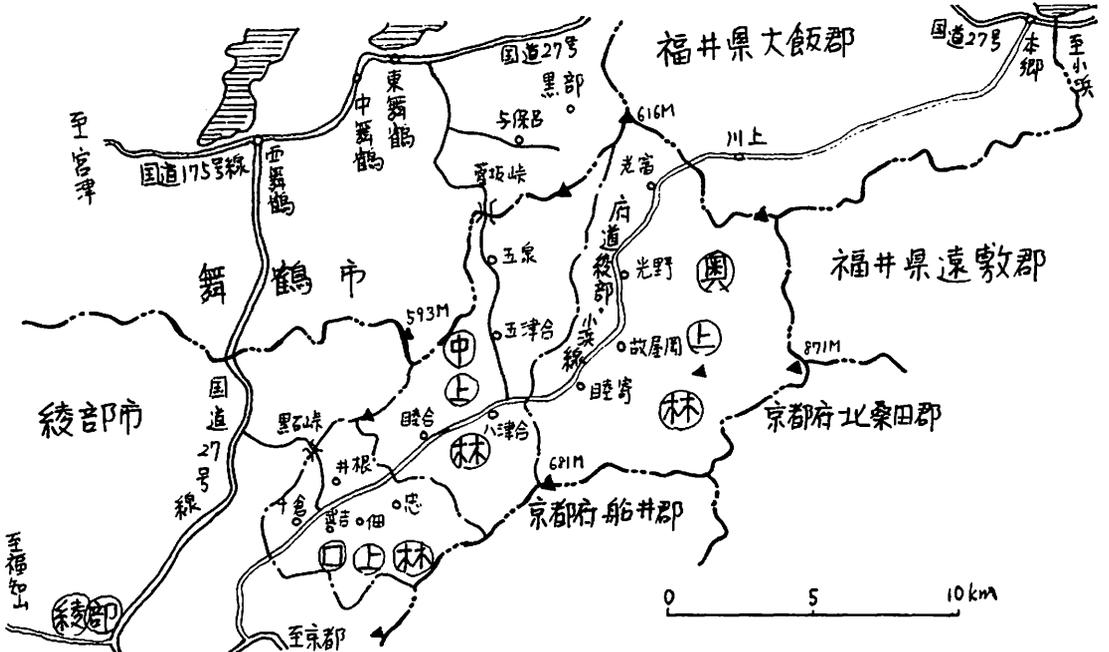
図1 京都府概図

(本文p.68)



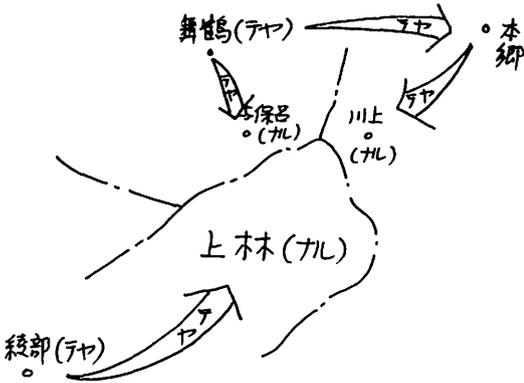
図2 上林とその周辺図

(本文p.68)



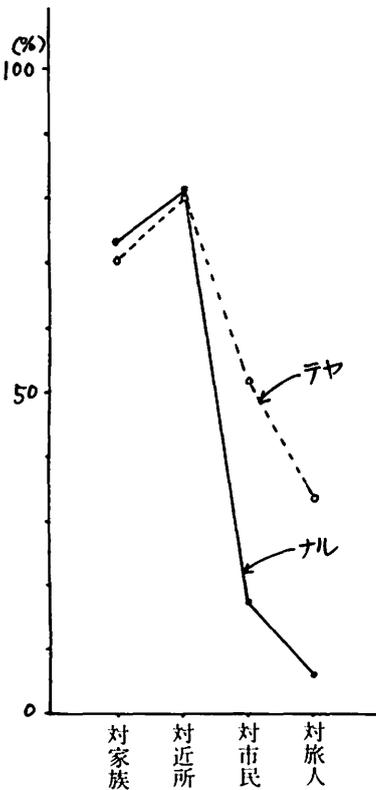
(本文p.70)

図5 上林とその周辺地域へのテヤの伝播経路



(本文p.72)

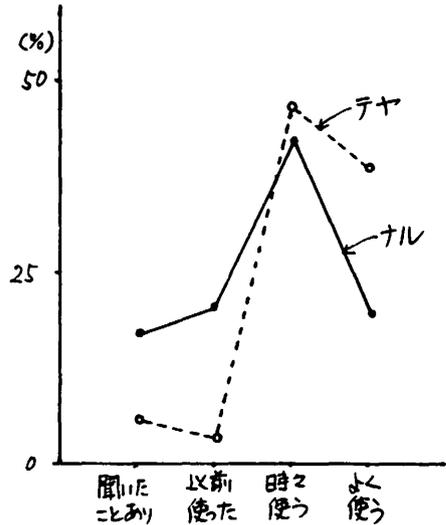
図7 ナルとテヤの場面による使い分け



- 「対家族」とは、「家族同志で話をするとき」であり、「対近所」とは「近所の顔見知りの人と話をするとき」である。また、「対市民」とは「綾部市の人で顔見知りでない人と話をするとき」であり、「対旅人」とは、「知らない旅の人と話をするとき」である。
- それぞれ、ナル、テヤを「時々使う」「よく使う」と答えた者におけるパーセンテージである。
- 本来ならば方言を一番よく使う場面である対家族において、対近所よりも使用頻度が下がっているのは、質問文をとりちがえて、家族に対しては、ナル、テヤという尊敬語を使用しないと答えたためと思われる。

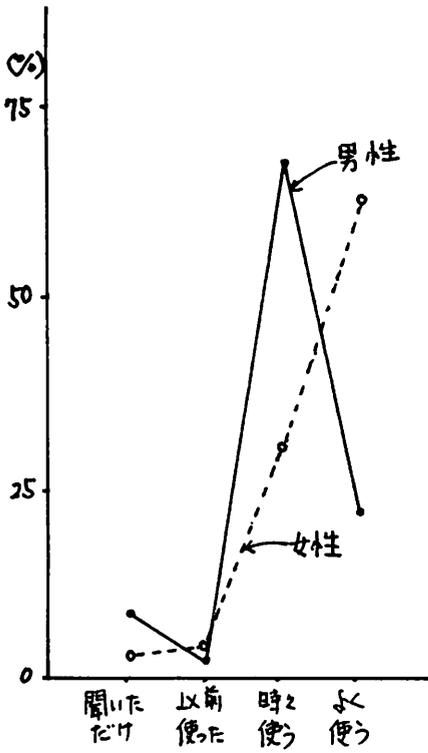
(本文p.72)

図6 ナルとテヤの使用状況



「聞いたことあり」とは「聞いたことはあるが、使ったことはない者」、「以前使った」は、「以前は使っていたが、今は使わない者」、「時々使う」とは、「今も時々使う者」、「よく使う」は、「今もよく使う者」のことである。

図8 男女別のテヤの使用状況 (本文p.74)



(本文p.75)

図10 認知的社会階層によるテヤの使用状況

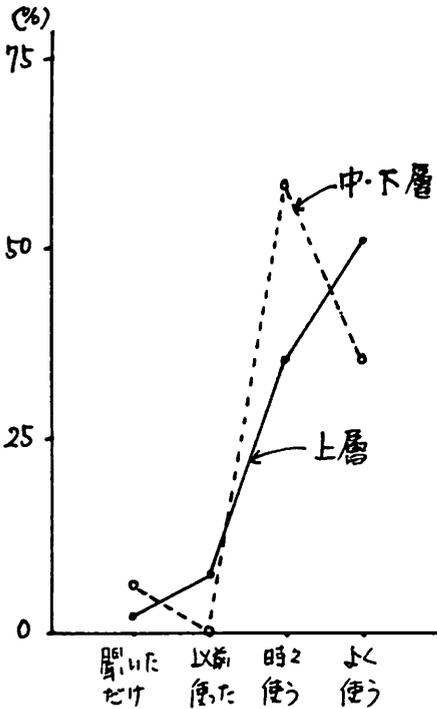
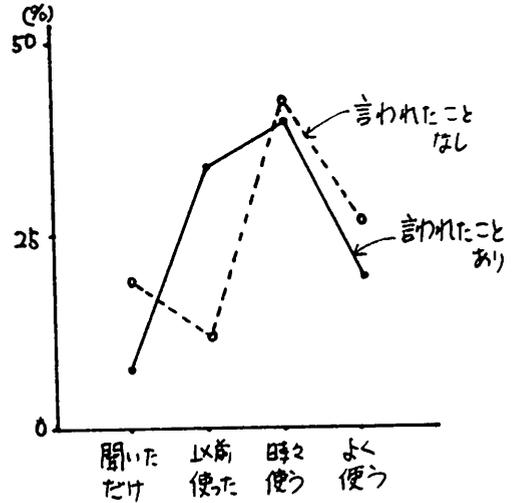
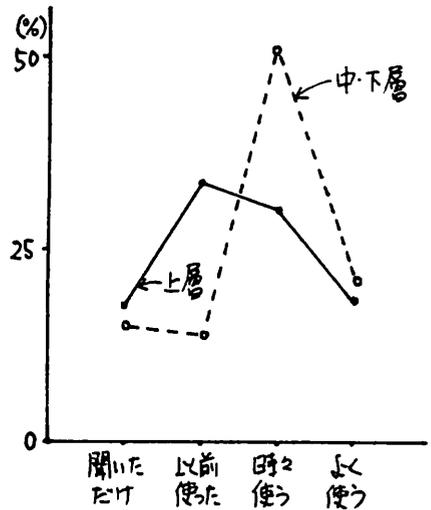


図9 方言について言われたことがあるか否かによるナルの使用状況



(本文p.75)

図11 認知的社会階層によるナルの使用状況



(本文 p. 75)

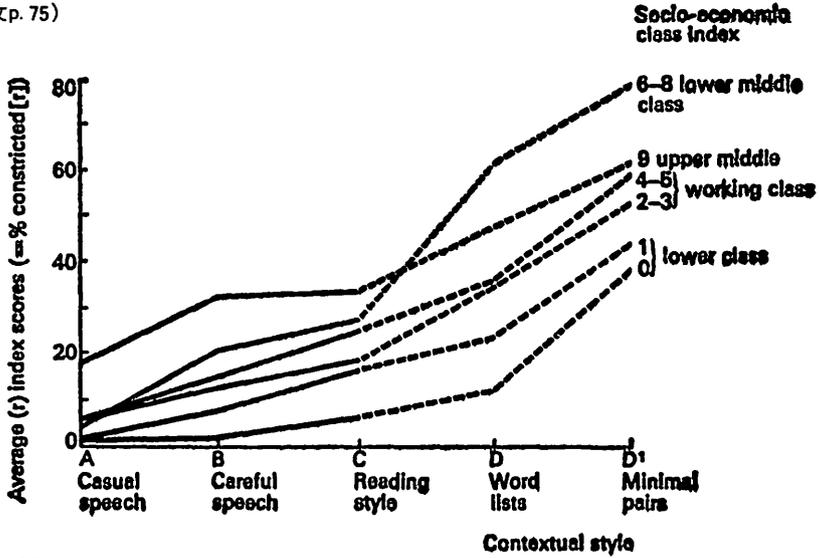


図12 Class stratification of (r) in *guard, car, beer, beard, etc.* for native New York City adults

[Labov, 1970ip. 192]

図13 認知的社会階層による (本文 p. 75)
テヤの使い分け

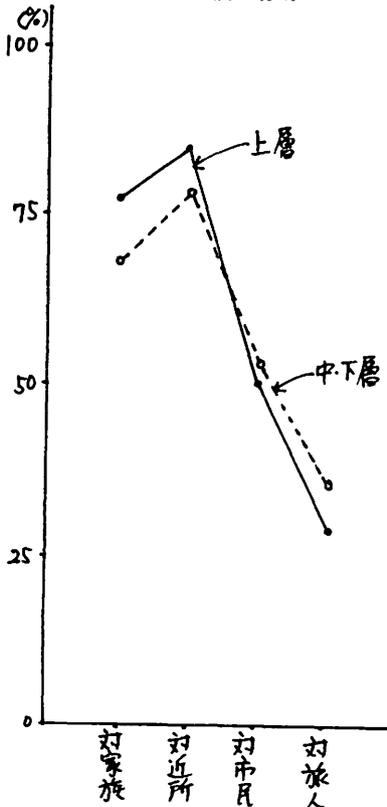


図14 認知的社会階層による (本文 p. 75)
ナルの使い分け

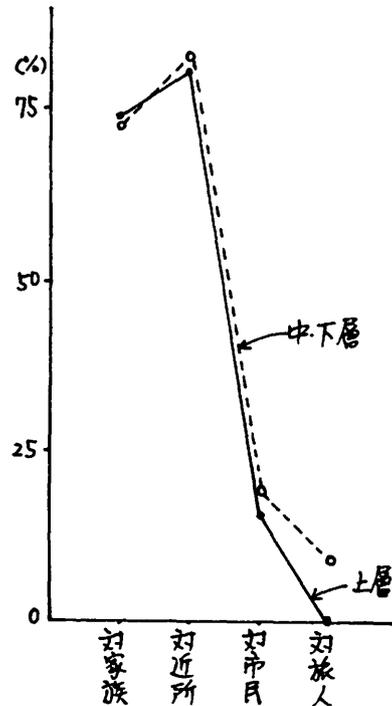


表1 調査対象者の全体的特色

(本文p.71)

	男 性	女 性	N. A	
○性 別	51.5	47.9	0.6	
	奥上林	中上林	N. A	
○居住地域	31.3	68.1	0.6	
	30～39歳	40～49歳	50歳以上	N. A
○年 齢	17.8	76.1	4.3	1.8
	小学校	旧制高等小 新制中学校	旧高女, 旧中, 新高 旧制実業学校	旧制高等学校 大 学
○学 歴	1.8	57.1	33.1	4.9
	農業中心	兼業中心	非農家	N. A
○農業の占める比重	14.1	69.9	12.9	3.1
	上林内	綾部市内(上林除く)	その他	勤めず, N. A
○勤務先(地域)	36.2	20.9	4.9	38.0
	0～3回	4～7回	8回以上	N. A
○綾部に出る回数 (月平均)	59.5	11.7	19.6	9.2
	綾部, 福知山, 舞鶴	近畿内	近畿以外	在外歴なし, N. A
○在外歴(居住地域)	20.9	23.3	8.6	47.2
	上 林	上林以外	N. A	
○配偶者の出身地	77.3	21.5	1.2	
	上 林	上林以外	N. A	
○母親の出身地	77.3	22.7	0.0	
	上 林	上林以外	N. A	
○父親の出身地	87.1	12.3	0.6	

数字はすべてパーセント(%)

(本文p.80)

表2 意識と行動

旅人 \ 道きき	共通語	混ざる	方言	計
共通語	148	114	30	292
混ざる	19	66	29	114
方言	5	18	28	51
計	172	198	87	457

$\chi^2=93,319$ P<0.001

(国立国語研究所 [1974 : p. 161])

(本文p.72)

表6 方言について言われた内容

- 出身地(上林)や方言名(上林弁)の指摘…12(19.7%)
(「上林やろ」「上林の者や」「上林弁」)
 - 侮蔑, 嘲笑, 模倣……………25(41.0%)
(馬鹿にされた, 笑われた, 口真似された)
 - その他・わかりにくい, 通じなかった… 5(8.2%)
 - ・テヤについて言われた…………… 3(4.9%)
 - ・その他……………16(26.2%)
- 計 61(100.0%)

(本文p.80)

表3 意識と行動の一致状況

旅人 \ 道きき	一致	不一致	計
共通語	148(50.7%)	144(49.3%)	292
混ざる	66(57.9%)	48(42.1%)	114
方言	28(54.9%)	23(45.1%)	51
計	242	215	475

$\chi^2=1,869$

(本文p.73)

表7 テレビ購入の時期

早い方	中ぐらい	遅い方	N. A
34.4%	47.9%	13.5%	4.3%

(本文p.74)

表8 ナルとテヤの「ていねいさ」の比較

ナル	テヤ	どちらとも いえない	N. A
5.5%	31.9%	57.1%	5.5%

(本文p.72)

表4 子供の時の使用方言

ナル	テヤ	その他
73.0%	15.3%	4.3%

(本文p.72)

表5 方言体験

方言について言われたこと

あり	なし	N. A
41.7%	41.7%	16.6%

方言を使って恥しい思いをしたこと

あり	なし	N. A
41.1%	50.9%	8.0%